

「キョーコ、キョーコ!」と、山本さんの周りにはいつも子どもたちの姿が



チルドレンは30万人以上、孤児は240万人にも上るといわれている。

ケニアは、職を求めて農村から都市に人口が流入、地縁血縁を基盤としたコミュニティが弱体化し、地域ぐるみで子どもを守るという伝統的な社会システムが消えつつある。路上生活を送るストリート

ガイドブックに再三と書かれていた注意を思い出した。街並みを見る限り、治安上の危険はそれほど感じなかったが、ビル群のすぐそばに広がるすさまじい規模のスラムを目にしたとき、腑に落ちた。貧富の差という問題がケニアに重くのしかかっているのだ。聞けば、世界に衝撃が走った2年前の大統領選挙後の暴動以降、格差は拡大し、治安の悪化も招いている。そしてこの影響は、飢えや病気のほか、児童労働、路上生活、薬物、飲酒、非行、犯罪といった形で、罪の

ない子どもたちに暗い影を落としている。「本来なら子どもは、家族やコミュニティに守られながら育っていくもの。しかし、貧しいがために親は子どもを捨てざるを得なかったり、危険な場所で働かせたりしてしまいます。そうした子どもたちは誰に保護されることもなく路上で生活するようにになり、生き延びる術として非行や犯罪に手を染めてしまっている」

ストリートチルドレンが生まれる最大の原因が貧困。養育費に困って子どもを手放したり、稼ぎ手として物ごいをさせたりと、親の都合で路上生活を余儀なくされるケースが多い。また、罪を犯した子どもたちは、子どもの基本的な権利原則に従って処遇されなければならないが、重罪ではなく、家出や無断欠席、飲酒などの非行や軽犯罪である場合も、子どもの権利を無視した司法制度で裁かれてしまうことがある。



## あふれる笑顔と心安らぐ居場所を

アフリカの中でも比較的経済状況が良いとされるケニアだが、その影で貧富の差が拡大し、子どもたちの健全な成長が妨げられる要因となっている。30万人のストリートチルドレン、240万人の孤児—これがケニアの現実。この状況に立ち向かうケニア人・日本人を取材するため、首都ナイロビに飛んだ。



昼食を終えてもうひと遊びした後はお昼寝タイム。一つのベッドに5~6人、肩を並べて眠るナイロビ孤児院の子どもたち

**増加する非行・少年犯罪とストリートチルドレン**  
さわやかな風がほおをなでる12月上旬の首都ナイロビ。一瞬、ここがアフリカであることを忘れてしまいそうになるほど、過ごしやすいく気候だ。空港から中心部へ延びる道路脇には、観光客に人気の国立公園が広がる。運がよければ野生のキリンにも

**愛されて育ってきたと感じてもらいたい**  
市街地から車で約30分、青年海外協力隊が活動するナイロビ孤児院を訪ねた。ここには、路上で保護されたり、両親を亡くしたり、育児放棄に遭った0~10歳の子どもたちが、常時70~90人が暮らしている。

親と離れ離れにある幼い彼らは、一体どんな表情をしているのだろうか。恐る恐る中に入ると、満面の笑みで駆け寄って来る子どもたち。その上、われ先にと競うように抱っこをせがんでくる。「毎日こんな感じなんですよ」と山本恭子隊員(幼児教育)が言う。



(上)ビルが林立するナイロビ市内の様子  
(下)まだ一人で立つこともできない幼いこの子ども、ナイロビ孤児院で暮らす

「最初は、みんなの輪に入れず一人部屋の隅っこで座り込んで、夜中に泣き出してしまったり、子どももいます。虐待によるやけどを負った子どもも来ます」。でも、山本さんはその理由を聞いたり、はしらない。ただひたすら、子どもたちと一緒にいて思いっきり遊ぶ。

取ることで、いつか、自分は愛されて育ってきたんだと思ってもらえるようにしたいんです」。そんな山本さんの周囲には、いつもたくさんの子供たちが集まる。庭に咲く花を髪飾りにして彼女の頭に乗せてくれる女の子や、「キョーコ!キョーコ!」と叫びながら手を引っ張る男の子。山本さんが子どもたちに愛されている証だ。

ケニアではまだまだ保育士の数が少なく、この孤児院も例外ではない。ときに、子どもたちが手を上げたり、怒鳴ってしまいう人もいます。「この国にはこの国のやり方があるので尊重すべき部分は尊重しつつも、私はいつも子どもたちと同じ目線で見たい。ほかの保育士さんたちに、



では対外試合を行い、勝利するまでになっている。  
キャプテンの男の子（17歳）は、ここに入所して2年になる。両親が離婚、新しい母親と馬が合わず、最後はナイフを手に「家を出ろ」と脅迫してしまった。「でも、今は見違えたような成長を遂げている」と矢端さんと言う。地味な練習メニューも一つ一つ真剣にこなし、試合でもリーダーシップを発揮。地域の選抜メンバーにも召集された。

### 罪の重さや年齢などに 応じた適切な処遇を

涼しい季節でも昼間は強い日差しが照りつける。この日、警察車両に先導されて郊外の警察署に向かった。

補導や逮捕された子どもが、最初に連れて行かれるのは警察署だ。そして署内で取り調べを受ける。子どもたちはその後、鑑別所（児童局管轄）で生活しながら裁判所（裁判所管轄）による鑑別結果を待ち、年齢や犯罪の重軽度、再犯の危険度などによって、少年院（刑務所管轄）あるいは更生学校（児童局管轄）というように処遇決定を受ける。犯罪ではなく保護を要する子どもであれば、警察署からそ



(上)カベテ警察署内の留置所。2畳程度の狭く薄暗い室内には、逮捕者が重なるように座っていた。この日、子どもはいなかった  
(中)ナイロビ郊外のカサバニ留置所で、子どもの扱い方について説明する警察のコミュニティー政策・ジェンダー問題・児童保護局スドゥタ・ピトゥリマ・キリンギ局長（右から2人目）  
(下)警察署によっては、子どもを担当する警官が配置される施設もある

のまま孤児院や児童養護施設などに送られることもある。  
「ですが今、このシステムがうまく機能していません」と児童局上級児童専門官のアイ・ワイチンガさん。凶悪犯罪と軽犯罪の子が同じ施設に送られる場合や、大人と同じ扱いを受けることがあるという。その理由としてワイチンガさんは、「各段階で子どもたちと接する警官、裁判官、刑務官、児童専門官、児童保護司、保護観察官などのスタッフの子どもの処遇に関する知識・能力が十分ではないから」と続ける。01年に児童法が施行され、非行・犯罪少年などの保護・支援に取り組んでいるケニア政府だが、資金や人材が不足し、10年近くたった今もその成果は十分といえない。ワイチンガさんは、「現状では、取

り調べで暴力行為があったり、鑑別所や更生学校などで長期間違法に子どもを拘束してしまうこともあり。子どもを正しく処遇するための能力向上が必要」と話す。  
こうした問題を解決するため、2009年10月から始まったのがJICAの「少年保護関連職員能力向上プロジェクト」だ。児童局、保護観察局、警察、裁判所、刑務所など少年保護に従事する職員を対象にした研修を実施するための体制を構築し、非行・犯罪少年の処遇の一層の充実化・強化を図ることが目的となっている。

「8月に予定されている第1回目の研修に向けて、今は研修カリキュラムと教官向けの指導マニュアルの作成などを進めているところ。日当や交通費、

研修に必要な機材などの運営費はプロジェクトの経費ではなく、ケニア側の予算を使うようになります。JICAの協力が終わっても、彼らだけで研修を継続していくことが重要だからです」と、国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEL）※からJICA専門家として派遣された菅野哲也さん。まだ種をまき始めたばかりのこのプロジェクト。終了する4年先が楽しみだ。

※国際連合と日本政府との協定に基づき、アジア・太平洋地域を中心とした国々の刑事司法行政の健全な発展と相互協力の促進を目的として、昭和36年に設立された国連の地域研修所。

100万人近くが暮らしているといわれる世界最大級のスラム「キベラ」。日中、学校に行かず、ぶらぶらしている子ども多い

それを肌で感じてもらえたら」。たつぷりの愛情で子どもたちの笑顔をはぐくむ山本さんの姿勢は、純朴な子どもたちの心に花を咲かせつつあった。

### 子どもたちに 健全な生活を

ナイロビ孤児院のように、親に代わって子どもを養育する施設はケニア国内にいくつもある。しかし、ストリートチルドレンや保護が必要な子どもの数と単純に比較しても、収容能力が絶対的に不足している。行き場がなく、町をうろつく子どもたち。近年の経済不安で、非行

や犯罪も増加している。  
ナイロビ孤児院から車で5分、カベテ更生学校に到着した。ここには、警察に補導されたり、軽犯罪を犯してしまった10〜18歳の少年約100人が入所している。最長3年の共同生活を通して、更生と自立を目指すための施設だ。  
日本でいう少年院に相当するこの施設。ナイロビ孤児院とは対照的に、子どもたちに笑顔はない。心の傷の深さを物語っているのだろうか。  
「校舎が塀に囲われていたり、厳重な警備が敷かれているわけではないので、脱走する子ども

ます。月に4〜5人程度でしようか」  
そう話すのは青年海外協力隊の矢端信也隊員（青少年活動）。彼はここで、算数や体育の授業を受け持ちながら、子どもたちの生活指導をしている。  
「それだけではありません。うそやけんか、盗みや日常茶飯事です。僕もモノを盗られたことがあります」  
こうした子どもたちを、現地の教員たちは体罰で押さえ込もうとする。体罰の恒常化は、文化的な背景もさることながら、更生学校の人手不足や予算が少ないことも影響している。「体罰はとも難しい問題。愛情があれば認められるということではないし、他方で、どうにかして威厳を保たなければ、子どもたちになめられてしまう」。赴任してから数カ月は葛藤の日々だった。  
その中で見つけた一筋の光がクラブ活動。「けんかをしたり、悪事を働いたり、元気が有り余っている子どもたちにはスポーツで汗をかいてもらうことが一番だと考えたんです」。矢端さんは、自身の特技を生かしてサッカークラブを結成。放課後の練習から始まった活動が、今



(上)市街地のすぐそば、キベラスラムを含むランガタ地区の児童局には「月に150人近い子どもが連れてこられる」と、サロメ・ムサ児童専門官（左）の説明を聞く菅野専門家（右）。他の地区と比べても、とても大きな数字だ  
(左)生徒たちとミニゲームで汗を流す矢端隊員。クラブ活動の時ばかりは、どの生徒にも笑顔が戻る